

平成17年度

## 病虫害発生予察特殊報 第3号

平成17年12月21日

茨城県病虫害防除所

Tel : 029-227-2445

### キクわい化病（キクわい化ウイルス）の発生について

病虫害名 : キクわい化病

発生作物 : キク

病原ウイルス : キクわい化ウイルス *Chrysanthemum stunt viroid* (CSVd)

#### 1. 発生経過

- (1) 平成17年11月に、石岡市と友部町のキク（小菊）でわい化症状を呈した株が認められた。
- (2) このため、農業総合センター園芸研究所を通じて、独立行政法人農業・生物系特定産業研究機構 花き研究所（生産利用部 病害制御研究室 松下陽介氏・月星隆雄氏）に同定を依頼した。
- (3) その結果、キクわい化ウイルス (CSVd) が検出され、キクわい化病であることが確認された。本県における、本病の発生は初めてである。

#### 2. 病徴

- (1) 茎の節間が短縮し、草丈が短くなる（写真1）。
- (2) 葉色がわずかに淡くなる。葉は小型化し、茎との角度が小さくなり、直立して生育する傾向がある。（写真2）
- (3) 花は小型化したり、開花が早まることがある。赤色系品種では、退色が起こりやすい。
- (4) ウィルスに感染した挿し穂は発根不良になる。

#### 3. 発生生態

- (1) 虫媒伝染、土壌伝染は認められておらず、主に汁液伝染する。
- (2) 主要な伝染源は、病徴が現われていない株も含めた罹病ギクである。罹病株の摘蕾、切り花、台刈りなどの作業により伝染する。
- (3) 本病は、幼苗時に感染が起こりやすい。罹病株の残渣が混入した用土で育苗したり、苗の植え付け時に、罹病苗の根と健全苗の根が接触すると伝染する可能性がある。
- (4) 病徴は高温期（25～30℃）に現われやすい。低温・弱光下では病原ウイルスが増殖しにくく、キクが感染していても病徴が現われにくい。

#### 4. 防除対策

農業による防除は困難であるため、以下のような耕種的防除を行う。

- (1) 罹病株を圃場に持ち込まないことが最も重要である。病徴が認められた圃場では、親株を更新する。
- (2) 作業時には、頻繁に、ハサミを変えるか消毒し、汁液伝染を防ぐ。
- (3) 罹病株の残渣が混入した育苗用土は使用しない。また、苗同士の接触が少ないセル育苗などを行う。
- (4) 罹病株は速やかに抜き取り、土中深く埋める。



(写真1) わい化症状



(写真2) 葉の病徴